

富士山噴火による酒匂川流域の災害と復興 - 田中休愚の事績を中心に -
 Disaster and reconstruction of the Sakawa-river basin by Mt. Fuji eruption
 - Focusing on the results of Tanaka Kyugu -

関口康弘

SEKIGUCHI Yasuhiro

1. 酒匂川の瀬替と足柄平野の開発

近世以前の酒匂川は氾濫のたびに足柄平野では流路が変化し分流をしていたと考えられる。天正 18(1590)年、豊臣秀吉の小田原攻めの後徳川家康は関東を領国とし、家臣の大久保氏が小田原城主となった。大久保忠世・忠隣父子は平野部の酒匂川の瀬替を行い川筋を一本にまとめ、用水路を足柄平野に四通させ新田開発を行った。川筋を一本にするためには急流の酒匂川を制御する必要があり、そのため谷口部に文禄元(1592)年から慶長 14(1609)年ごろにかけて春日森土手、岩流瀬土手、大口土手を築造した。結果平野部の開発が進んだ。一例を示すと平野北部中央に位置する金井嶋村(現開成町)は天正 19(1591)年の耕地面積を 100 とすると、約 50 年後の寛永 17(1640)年には 200 以上になった。とくに水田面積の増加が大きく、米の増産すなわち石高が上昇した。大久保氏が目指した開発政策は着実に成果を上げたのである。

2. 元禄大地震と富士山の噴火

生産活動が安定し始めた元禄16(1703)年11月23日(新暦12月31日)南関東は激しい地震に見舞われた。元禄地震である。4年後宝永4(1707)年11月23日(同12月16日)富士山が噴火した。富士山宝永大噴火である。これらにより相模国とくに西部地域は甚大な被害を被った。噴火によるスコリアは酒匂川流域に降り積もり、山間部では多いところでは1m前後、平野部でも50cm前後の厚さとなった。このスコリアが降雨により酒匂川へ集中、河床が上昇し川は大氾濫をくりかえすこととなった。

酒匂川治水の要衝である岩流瀬土手・大口土手が宝永5(1708)年6月22日(同8月8日)大きく決壊、足柄平野は濁流に襲われた。このため幕府は両土手を修築しどうにか平野を水害から守ろうとしたが、再三破堤が繰り返された。とくに正徳元(1711)年7月27日(同9月9日)の水害は深刻で、以後幕府は両土手の再築造を放棄するほどであった。これにより酒匂川の流路が右岸の足柄平野西側(現南足柄市側)の新流路となり、村々の生活基盤や生産活動が大きく損なわれるにことになった。

3. 農民の暮らしと東西対立

新流路となった右岸の村々は水害の危険から逃れるため、西側の台地上へ避難し「小屋掛」とよばれる厳しい生活を余儀なくされた。正徳3(1713)年6月に幕府へ提出した嘆願書には、生活の手段をすべて奪われ餓死者が出るような有様になっているとし、一刻も早く岩流瀬・大口両土手の締切を訴えている。また享保3(1718)年4月の訴願状では、酒匂川の元の流路の足柄平野中央部から東側の左岸の村々は旧河川路を用水路とし川の跡地を耕地に開発をしてしまい、新流路の固定化を狙っていると西側村々は訴え、一刻も早く流路復帰をしてほしいと訴えている。享保5(1720)年の嘆願書では新たに流路となった自分たち平野西側の村々を西通りとし、旧流路周辺の村々は向通りと

神奈川県立秦野曽屋高等学校 Hadanosoya Highschool, Kanagawa Prefecture

キーワード：足柄平野 酒匂川 元禄地震と宝永富士山噴火 田中休愚 禹王(文命)

呼んだ。向通りの村々は自分たちに都合の良い治水工事を行い復興が進んで裕福な者も現れ流路の固定化を狙っているとし、向通りは私利私欲のために私たち西通りの願いである土手締切と流路の復旧を妨害をしていると強く非難した。足柄平野の村々間で利害の対立が深まったのである。

4. 田中休愚の登場

こうして足柄平野の村々が深刻な対立を抱える中、決壊したまま放置された岩流瀬土手・大口土手を締切り、酒匂川を以前の流路に戻したのは田中休愚である。休愚は武蔵国多摩郡平沢村(現東京都あきる野市)出身の農民で、東海道川崎宿の名主家養子となり疲弊した宿の立て直しに手腕を発揮した。休愚が酒匂川治水にかかわるようになったのは、江戸町奉行のみならず南関東の幕領の農政責任者であった大岡越前守忠相が休愚の著書『民間省要』に着目し、彼を取り立てたからである。大岡は8代将軍徳川吉宗の信頼が厚く対話も十分であったので、休愚を取り立てることや彼を酒匂川の復旧事業の責任者に充てることも吉宗は承知していたと考えられる。

享保 10(1725)年 12 月、江戸大岡邸において休愚は大岡の指揮監督の下で「相州酒匂川両堤御普請所掛り」を命ぜられ酒匂川治水担当となった。年が明けて早々締切り工事にとりかかった。これにあたっては弁慶杵とよばれる構造物を水の勢いがあたる土手の表面に並べ土手の強度を増すこととした。工事は短期間のうちに行われ享保 11(1726)年 4 月には岩流瀬土手・大口土手の締切工事が完了した。休愚は弁慶杵などの水制構造物を地元川村大工に請負わせて復興の術とした。

5. 文命東西宮と文命東西碑の建立

土手の完成後休愚は中国古代夏王朝の創始者とされる禹王(名は文命)を両土手に祀った。禹王は黄河の治水に貢献した治水神として崇められていて、日本では鴨川などにもその例がある。そのため休愚は酒匂川治水の要である両土手上に文命宮(社)を創建し、岩流瀬土手を文命西堤、大口土手を文命東堤と命名した。文命(禹王)を祀ったねらいは噴火と氾濫による荒廃で東西の地域対立をかかえた村々をまとめあげ復興の途をつけること、文命東西堤は酒匂川治水の要衝であるため、足柄平野にとって特別な存在であることを人々に認識させ、かつ永続的な堤保持の仕掛けづくりにあった。このために休愚は東西文命宮の脇に治水の心構えや文命の事跡、幕府による今事業の偉業などを漢文体で刻んだ堤碑を二基建立した。文命西堤碑、文命東堤碑である。とくに東堤碑文は休愚が文章を起こし上司の大岡に提出し、大岡から 8 代将軍徳川吉宗に献上された。文を謁見した吉宗は荻生徂徠に相談せよと命じ、大岡から徂徠へ渡し、徂徠が添削したのち大岡から休愚に戻されている。東堤碑文には将軍吉宗や大岡忠相、荻生徂徠が深く関わっている。

6. 祭りの創設

享保 12(1727)年 8 月、江戸から多忙の中を大岡忠相が文命東西堤へやってきた。彼の到着を待って完成式典が催されたと思われる。このとき将軍吉宗から大岡・休愚を通じて東堤下の村々に 100 両が、西堤をかかえる河岸村へ 20 両が下賜された。これを元手に毎年 4 月 1 日には治水神文命(禹王)の祭礼を執り行うことが命ぜられた。堤防の安全祈願のための祭礼創始であるが、民衆の水防に対する意識を高める儀式として重要となった。祭礼時には堤より下流の村人に、堤上に石を運び上げる作業を求めた。これは地域の村人たちが主体となって治水を行うことを象徴する儀式であるといえよう。こうしたことが毎年繰り返されることにより流域村々の連帯が強められ、堤防の安全が持続可能となることが求められたのである。この祭礼は現在も続けられ、まさに休愚の狙いが今日でも具現化されているといえよう。